

スマホを置きなさい

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」
(詩篇 46 篇 10 節)

AFP 通信によりますと、先頃、パチカンはサンピエトロ広場でのミサに集まった司教や神父、さらには信者たちに対して、ミサの最中にはスマートフォンや携帯電話は手に取らずに置いておくようにと、ローマ法王フランシスコ一世が厳しく叱責する場面があったそうです。ミサに現われた法王に向けてスマホを高く掲げて撮影を試みる高位の司教らに「私がミサを行なう度に大勢がスマホを掲げて写真を撮ろうとする。信者だけではない。神父も司教もだ。とても悲しい。」と強く訴えた法王。さらに、フランシスコ法王は「神父が信者に『心を高く掲げて』と呼び掛けることはあっても、『スマホを高く掲げて』などは間違っても言わない」と、不快感を露にしたそうです。

確かに、聖書には、上掲のみことばのように「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」とあります。現代風に言い直せば、スマホや携帯をはじめとする一切のことを「やめよ」ということであり、ただ主なる神様にこそ集中して「わたしこそ神であることを知れ」ということなのではないでしょうか？

また、法王が引用したと思われる哀歌 3 章 41 節にはこうあります。「私たちの手をも心をも天におられる神に向けて上げよう」。ちなみに、このみことばを拠り所にした讚美歌で、愛餐会でも練習したものに「こころを高くあげよう」(第二編 1 番)という讚美歌があります。

礼拝という神の御前で、高く掲げるべきものは、スマホではなく、私たちの心、真心なのではないでしょうか？・・・さあ、スマホを置きましょう。

ブレない生き方を求めて

「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」
(箴言3章5～6節)

現在、私が乗っている車のナビはいろいろな忠告をしてくれます。朝一番にエンジンを付けると「朝日に注意して下さい」、午後三時頃になりますと「西日に注意して下さい」。極み付けは、高速道路などで運転がブレたりしますと、すかさず「ふらつきが大きくなりました。ご注意ください。」と注意されるのです。身が引き締まります。

上掲のみことば曰く、自分の悟りにばかり頼っていると、行くべき人生という道のりをはみ出したり、ブレたりしかねない。ゆえに、ブレることのない絶対者、主なる神様にこそ信頼し、そんな主なる神様をこそ見上げ、認めつつ進んで行きなさい。そうすることによって、人生の道すじをまっすぐにしていただけるというのです。

その昔、今のようなレーダー等のない時代は、「天測航海」と言って、天体、すなわち、星を見上げて航海をしたのです。北半球であれば北極星を、南半球であれば南十字星などを観測しつつ、それを基点に自分の正確な位置を測定し、ブレない航海を成し遂げた訳です。私たち信仰者にとって見上げるべきは主なる神様に他なりません。

あの東方の博士たちが特別な星に導かれた時、慢心したのか一時的に星から目を離し、自分たちの分別に頼って、本来行くべきベツレヘムの馬小屋ではなく、エルサレムの王宮に行ってしまう、大きなピンチを招きました。このことはやはり、私たちが自分の悟り(分別)のみで人生という道のりを進むのではなく、主なる神様をこそ見上げ、その導きに従っていくことの大切さを教えてくれているのではないのでしょうか？

舞台裏の活躍、地の塩としての喜び

「あなたがたは、地の塩です。・・・あなたがたは世界の光です。・・・」

(マタイの福音書5章13～14節)

聖書を見ますと、神に用いられる人のタイプには、おおよそ二種類があるように思います。一つはどちらかと言えば目立った働きに召された「世界」の光」タイプの人であり、もう一つは必ずしも目立たないものの舞台裏で大切な働きをする「地の塩」タイプの人ではないでしょうか？

例えば、前者「世界」の光」的な人として、モーセ、ダビデ、パウロを挙げるとするならば、それに対する後者「地の塩」的な人としては、アロン、サムエル、バルナバを忘れてはいけません。イスラエルの偉大な指導者モーセのリーダーシップをそのスポークスマンとして支えた兄アロンの存在、また、名王ダビデを見出し、油を注いだサムエルの働き、さらには、キリスト教最大の弟子パウロを表舞台に出すために舞台裏に徹したバルナバの謙虚さを私たちは見過ごしにしてはならないのです。

いかに、主の前における「地の塩」としての働き、舞台裏の活躍が大切であるかを物語る、松田明三郎氏のこんな散文詩があります。

「クリスマスのページェントで、日曜学校の上級生たちは、三人の博士や牧羊者の群やマリヤなど、それぞれ人の眼につく役をふりあてられたが、一人の少女は誰も見ていない舞台の背後に隠れて星を動かす役が当たった。

「お母さん、私は今夜星を動かすの。見ていてちょうだいね。」その夜、堂に満ちた会衆はベツレヘムの星を動かした者が誰であるか気づかなかつたけれど、彼女の母だけは知っていた。そこに少女の喜びがあった。」

私たちが、時に、舞台裏に立たせられる時、主の視線をこそ喜びとしたいものです。

栄光は神に！

「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」（コリント人への手紙第一 3章6～7節）

私たち人間は、何かすばらしいことがありますと、そこに関わった人間をとかく賞賛しようとしています。もちろん、それ自体は決して悪いことではないでしょう。その方の労をねぎらい、その方を励ますということにおいても、そこには一定の意義があると思います。しかしながら、過ぎたるは及ばざるが如し。それをやり過ぎますと、賞賛された方が勘違いをしたり、それこそ、神に成り上がったりしてしまうことがあるのではないのでしょうか？歴史はそう物語っています。

上掲のみことばは、人の働きや業(わざ)も尊いものの、それ以上に、それを用いて事を為して下さる神様にこそ栄光を帰すべきことを勧めているのではないのでしょうか？私たちは、その人を用いて、大いなる事を為して下さる神様にこそ、栄光を帰したいと思います。このことを、誰かが良い働きをした時のみならず、自分がそれなりに良い働きをした時にこそ、肝に銘じたいと思います。

何度か分かち合っていることですが・・・あのヨハン・セバスチャン・バッハは、曲を作り上げた後、楽譜の端に“S. D. G.”と書き記したと言います。それは、ラテン語で“Soli Deo Gloria(ソリ・デオ・グロリア)”、すなわち「神にのみ栄光」という意味です。作曲した後に、バッハは、決して有頂天にならずに、その栄光を神にのみ帰したということではないのでしょうか？

私たちもそれぞれ、他者や自分のすばらしい働きの背後に働いてそうさせて下さった、あるいはそうして下さる神様にのみ栄光を帰したいと思います。栄光は神に！

日曜日にスイッチを入れて・・・ハレルヤ・サンデー！

「さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に
来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。・・・うしろを振り向
いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。」

(ヨハネの福音書20章1節、14節)

月曜日は気分が重い・・・いわゆる“ブルー・マンデー”。これは必ずし
も日本だけの状況ではなく、基本的に、洋の東西を問わない現象だそうです。
アメリカなどでは、銃乱射事件など、比較的、月曜日に大きな事件が起きる
ことが多いという話を聞いたことがあります。また、最近の新聞記事で読ん
だのですが、医学的にも月曜日の午前中に心筋梗塞などの心疾患事故が集中
していることが統計的に明確だそうです。そのことに目を留めた調査・研究
によれば、土曜～日曜にリラックスした分、仕事始めの月曜日の午前中に一
気にストレスがかかり、心臓に負担を与えているということでした。ゆえに、
その研究者らは、月曜日の午前中に一気にギアを入れ過ぎないように、徐々に
慣らしていく「スロー・マンデー」を呼びかけているのです。どうやら最近
言われ始めた「プレミアム・フライデー」よりも、この「スロー・マンデー」
の方に分があるようですね。

ただ、現実的には、月曜日の午前中にゆっくりするのはかなり無理がある
のではないのでしょうか？そこで、私が提唱したいのは、日曜日から徐々にギ
アをハイに入れていく、名付けて「ハレルヤ・サンデー」。上掲のみことば
にもありますように、「週の初めの日」、すなわち、日曜日に、私たちは礼
拝を通して、復活の主にお会いするのです。気持ちが高まらないはずあり
ません。そこで、私たちは、言うなれば、霊的なエンジンを始動し、月曜日
から始まるウィークデーに復活の証人として出て行くのです。日曜日のうち
にスイッチをオフからオンへ。さあ、今日もスイッチ・オン！

目指せ、日本のベレヤ！

「ここ(=ベレヤ)のユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」
(使徒の働き 17 章 11 節)

今年、2017 年は、キリスト教の歴史、教会史において、大きな節目の年、いわゆる宗教改革 500 周年であることは、事あるごとにお分かちしているところです。カトリック教会の一司祭だった、かの宗教改革者マルチン・ルターが、カトリック教会への抗議文「九十五か条の論題」をヴィッテルヴェルク城教会の門扉に貼り付けたのが、今からちょうど 500 年前、1517 年の 10 月 31 日でした。ちなみに、まもなくやって来ます 10 月 31 日は「宗教改革記念日」となっています。

ところで、宗教改革の三大原理と言われますものに「信仰義認」、「万人祭司」、「聖書原理」があります。また、宗教改革には、五つの“のみ”(「蜜」ではない)が重要であったと言われています。「信仰のみ」(sola fide)、「聖書のみ」(sola Scriptura)、「恵みのみ」(sola Gratia)、「キリストのみ」(solo Christo)、「神の栄光のみ」(soli Deo Gloria)です。(参照：『五つの“ソラから”』吉田隆[いのちのことば社])

三大原理には「聖書原理」、五つの“のみ”には「聖書のみ」がありました。つまり、宗教改革では、聖書以外のもの(例えば、形式的な伝統など)を抛り所とすることへの強い疑問と警戒があったのです。実は、この傾向は、“キリストの教会”の聖書復帰運動(ストーン=キャンベル・ムーブメント)にも顕著でした。

週報の表紙に掲げられた、御茶の水が目指すべき七つのビジョン(あるべき教会の姿)の最初にある「神に喜ばれる聖書的な教会」は、まさにそこを意識したものなのです。そんな私たちの模範は、上掲のみことばにあるベレヤ教会ではないでしょうか？

鎖のひとつとなる

「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競争を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」
(ヘブル人への手紙 12 章 1 節)

iPS 細胞の開発でノーベル賞の生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授。最近では iPS 細胞に匹敵するかもしれないと言われる遺伝子「NAT1(ナット・ワン)」の研究に力を入れているそうですが、この程、あるテレビ番組がその様子を放映しておりました。その中で、山中教授の哲学と申しますか、信念のようなものが紹介されておりました。それが「鎖のひとつになる」ということです。

iPS 細胞をはじめとして、生命科学の世界における様々な功績は、それまでに多くの研究者たちがつないで来た、言わば長い“鎖”があったからこそ為し得たものだと、山中教授は考えます。ゆえに、そのような鎖を一つ一つつないでいけば、やがてさらなる発見や功績に辿り着くかもしれない。だからこそ、自分は自分の為し得る目の前の“鎖”をしっかりと完成させていきたい。それが、山中教授の研究者としての誇りだと言います。

来年(2018年)、私たち御茶の水キリストの教会は、創立七十周年の節目を迎えます。原点回帰で、創立者の働きを覚えることも有益ですが、それだけでなく、その後にも、神のみわざを創立者から受け継いできた有名無名の多くの兄弟姉妹、言うなれば、リリース投手たちがいたことをもしっかり覚えたいと思います。まさに、この七十年の歴史において、多くの“鎖”が作られ、結び合わせられてきたのではないのでしょうか？ 私たちもまた、主の為、後世の為に、そんな“鎖”をひとつ完成させたいと思います。

ほのかな優しい芳香 ～クリスチャン・アロマセラピー～

「私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」（コリント人への手紙第二2章15節）

先日、道を歩いておりましたら、どこからともなくほのかな優しい芳香が漂ってきました。そう、金木犀の香りです。辺りに金木犀の木は見当たりませんでしたので、風に乗って香りが運ばれて来たのかもしれませんが。小さな秋を感じた瞬間でした。

似て非なるもの・・・「香り」と「匂い」。多くの場合、「香り」は良い意味でのみ使い、「匂い」は悪い意味でも使われることがあるのではないのでしょうか？秋を感じさせる金木犀は、まさに芳(かぐわ)しい「香り」です。

ところで、そんな「香り」と「匂い」、もっと言えば、良い香りと悪い匂い、実は科(化学)的には紙一重なのだそうです。例えば、食欲をそそる美味しそうな香りと顔を背けたくなるような嫌な匂いはとても近い香り(匂い)だったりするようです。また、仮に、とても良い香りであっても、それが強過ぎると、かえって、悪い匂いに感じてしまうこともあるようです。臭覚はとても敏感なのですね。

上掲のみことばには、私たちキリスト者の存在が、信者・未信者を問わず、全ての人々の中にあって「かぐわしいキリストのかおり」であることが述べられています。「かぐわしい」とありますので、あまり強烈ではなさそうです。キリスト者であることを必要以上に強調せずに、むしろ、その雰囲気や行動において、キリストらしさ、キリストの品格をこそ醸し出したいものです。

植物から抽出した芳香成分の精油等を使った心身ケアの自然療法アロマセラピーが知られて久しくなりますが、まさに、私たちキリスト者はその証しや隣人愛を通して、クリスチャン・アロマセラピー(キリストの芳香療法)を推し進めて参りましょう。

何はなくとも聖書のみことば

「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」

(詩篇 119 篇 105 節)

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」
(マタイの福音書 4 章 4 節)

先週の水曜日(8月30日)の『今日の力』の小見出しは、「どうしても安心できないときは聖書朗読」というものでした。米国のある姉妹は、その愛する夫がICU(集中治療室)で昏睡状態に陥り、何ヶ月も意識不明の状態であった不安の中、聖書のみことばにより大いに慰められ、落ち着かせられ、励まされたというのです。

私たちにも不安な夕暮れがあり、絶望の夜と思われるような時が少なからずあるのではないのでしょうか? そんな時、聖書のみことばを通して、神様は私たちに優しく語りかけ、必要な慰めや励ましを与え、行くべき方向性をお示しになるのです。ゆえに、私たちの人生という旅路には、聖書のみことばはなくてはならないものなのではないのでしょうか?

過日開催されました箱根バイブル・キャンプの開会礼拝で、私たちキリスト者はこの地上では“旅人”であり、御茶の水キリストの教会はある意味、“旅する教会”であることを分かち合いました。その際、こんな旅に関するなぞなぞを出題しました。「旅には必要不可欠で、遭難の際には伸ばせば飢えをしのげる物は一体何でしょうか?」・・・答えは<地図>です。地図は旅には欠かせませんし、伸ばして発音すれば「チーズ」、食べられます!?

聖書のみことばは、上掲のみことばの如く、私たち、地上の“旅人”、“旅する教会”にとっては、まさに、人生という旅路の“地図”であり、“チーズ”なのです。

伝道は“聴く”ことから

「ある夜、パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が彼の前に立って、『マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください。』と懇願するのであった。パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。神が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信したからである。」
(使徒の働き 16 章 9～10 節)

その時、歴史は動いた！まさに、上掲のみことばは、キリスト教二千年の歴史が大きく動いた瞬間の一つではなかったでしょうか？なぜならば、アジアの片隅、パレスチナにおける福音の初めが、この瞬間、ヨーロッパ、西欧世界に届くことになったからです。

パウロは、幻の中で、一人のマケドニヤ人(=ギリシヤ人)の叫びを耳にしました。その直後に、ルカは「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした」と書いてありますが、ここで彼は『使徒の働き』で初めて、「私たち」という一人称複数形を使って、ルカ自身もこの第二回伝道旅行に途中から参加したことをほのめかしているのです。このことから、このマケドニヤ人とは、ルカ自身のことなのではないか、という推論も取り沙汰されるほどです。

真偽の程は定かではありませんが、少なくとも、幻の中で、パウロは一人のマケドニヤ人=西欧人の心の叫びを聴き、その伝道の足をヨーロッパへと伸ばしたことに間違いはありません。このことは、伝道(=世界宣教)が、まず神の声を聴き、誰かの叫びに耳を傾ける、すなわち、その人の真の必要を知るところから始まるということを如実に物語っているのではないのでしょうか？

確かに、アメリカ人宣教師たちは戦後、私たち日本人の心の叫びを聴いたのです！

小さな最善を尽くす

「すると、イエスは弟子たちを呼び寄せて、こう言われた。『まことに、あなたがたに告げます。この貧しいやもめは、献金箱に投げ入れていたどの人よりもたくさん投げ入れました。みなは、あり余る中から投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。』」
(マルコの福音書 12 章 43～44 節)

私たちの群れである“キリストの教会”の目指すべきところは、言うまでもなく聖書に示された教会の姿に復帰することであり、その姿を回復することにほかなりません。しかしながら、そんな聖書に示された教会を仮に歴史上の“初代教会”とするならば、そこには人間的な問題や必ずしも完全・完璧ではない姿もあったことは明らかです。だとすれば、はたして、私たち“キリストの教会”には、一体、何が求められているのでしょうか？

聖書全体を通して考えてみますと、神は私たち人間に対して、必ずしも完全・完璧を期待されている訳ではないことが分かります。なぜなら、神は私たち人間が決して完全・完璧ではないこと、つまり、欠けや弱さ、すなわち、罪があることをご存知だからです。だからこそ、十字架と復活という罪の贖いというみわざが必要でした。

では、神は何を私たちに期待されているのでしょうか？・・・少なくとも一つ言えることは、私たちキリスト者一人一人が、また、教会として、神の救いの恵みに応答することにおいて最善を尽くす、でき得る限りのベストを尽くすということにほかならないのではないのでしょうか？聖書はそのことを如実に物語っているのです。

今、私たちに最も期待されていることは、キリスト者として、また、教会として、「レプタ銅貨を二つ」、すなわち、今できる小さな最善をおさげすることなのです！

旅する教会

「私は地では旅人です。あなたの仰せを私に隠さないでください。」

(詩篇 119 篇 19 節)

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」

(へブル人への手紙 11 章 13 節)

率直に述べますと、かつて、私たちの群れである“キリストの教会”は、自分たちこそ聖書に示された教会の姿に既に復帰していると誤解していた時期がありました。しかしながら、その後の歴史的反省の中で、私たち“キリストの教会”は、必ずしも、まだ聖書に示された教会の姿に復帰してはいない、そのような理想的な姿を回復してはいないとの認識に至ったのです。

ゆえに、私たち“キリストの教会”は、現在、聖書に示された真の教会の姿に復帰・回復する途上にある、言わば「工事中の教会」であり、今なお目的地には着いていない「旅する教会」であることを謙虚に、かつ、しっかりと自覚すべきなのではないでしょうか？

トラベルにはトラブル。旅にはハプニングが付き物です。しかし、そんなハプニングこそが、まさに旅の醍醐味であり、後から振り返った時に、旅の素敵な思い出にこそなるのではないのでしょうか？そして、そのような多難な旅において最も大事なことは、旅の目的地(ビジョン)を見据え続けることであり、地図やガイドブック(聖書)を見離さず、ツアーガイド(インマヌエルの主)を見失わないことではないのでしょうか？

パウロの厳しさ、バルナバの懐深さ

「見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。」

(ローマ人への手紙 11 章 22 節)

私たちの信ずる神様には、一見すると相反する二つのご性質があります。一つは神の<義>であり、もう一つは神の<愛>です。そして、これら二つのご性質の調和の極みが“十字架”なのではないでしょうか？讃美歌 262 番の一節の歌詞に♪十字架のもとぞいとやすけき、神の義と愛のあえるところ♪と歌われている通りです。

私はよく冗談で、我が家の教育に関しては、家内が<義>担当で、私が<愛>担当ですと冗談を言ったりいたします。確かに、子供を教育するに当たっては、義と愛、厳しさといつくしみの両方が必要なのではないのでしょうか？ゆえに、パウロも上掲のみことばで、「見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。」と、その両方に目を注ぐことを勧めております。

『使徒の働き』15 章 36 節以下には、第二回伝道旅行に出て行くにあたって、パウロとバルナバが、「マルコと呼ばれるヨハネ」を巡って、紛糾した場面が描かれています。このような反目を包み隠さずにしっかりと描くところに聖書の真実性があるのではないのでしょうか？それはさておき、ここでパウロは「パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよい」と厳しく考えたのに対して、バルナバは「いっしょに連れて行くつもりであった」という懐深さを示したのです。

結果的に、この両者の厳しさと懐深さが、後のマルコを育て上げ、パウロをして「役に立つ」(Ⅱテモテ 4:11)と言わしめ、マルコは福音書を書く榮譽にも与ったのです！

「自分に厳しい」とは

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。」

(マタイの福音書7章13節)

最近、読みました本に、こんなやりとりが記されておりました。・・・ある音楽家がとても厳しい練習を積み重ね、その実力に日々、磨きをかけていました。その姿を見た人が問い掛けたそうです。「あなたはどのようにしてそこまで、自分に厳しくできるのですか?」と。すると、音楽家はこう答えたというのです。「いいえ。私は自分に厳しいのではなく、自分を大切にしているだけです。」。

自分を愛するとは、決してナルシストになることではなく、本当の意味で、自分を大切にすることであり、場合によっては、自分に厳しくすることでもあるのではないのでしょうか?そして、上記の音楽家のように、自分を大切にすることからこそ、自分に厳しくなれるのだと思います。さらに、言葉を補えば、自分を大切にすることとは、神に創造された自分、「聖霊の宮」(1コリント6:19)としての自分を大切にすることに他ならないのではないのでしょうか?

よく「自分に厳しく、他人に優しく!」と言われますが、現実には、私たちはどうしても、その真逆で、「他人に厳しく、自分に優しく!?!」になってしまう傾向があるのではないのでしょうか?もちろん、他者のためにも、それなりに愛をもって厳しく、その人を大切に考えるからこそ厳しく対処する必要があるかもしれません。しかしながら、何よりもまず、「自分に厳しく」あることをこそ心掛けたいと思います。

主イエスは、上掲のみことばのように、私たち一人一人に「狭い門からはいりなさい」と言われました。私たちは他者を「狭い門」へと押し出す前に、まずは自らが「狭い門」へとすすんで入っていきたいと思います。それが良き模範となるように・・・。

神への愛と隣人愛、それは礼拝と優しさ！

「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。

『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」
(マタイの福音書 22 章 37～40 節)

「律法全体と預言者と(当時の“聖書”を言い表わす慣用表現)が、この二つの戒めにかかっているのです」と言われた主イエスは、いわゆる“十戒”を要約して、上記の如く、第一の戒めと第二の戒めの二つの戒めにまとめました。第一戒から第四戒までを神への義務と捉え、申命記(6:5)を引用しつつ“神への愛”として示し、第五戒から第十戒までを隣人への義務と捉え、レビ記(19:18)を引用しつつ、“隣人愛”として示しているのです。

ちなみに、現在(7/29～30)行われておりますCS小中学生キャンプのテーマは「互いに愛し合いなさい[応用編]」(I コリント 13:4)。はたして、私たちは、愛、すなわち、神への愛や隣人愛を、どのように実生活に応用すべきなのでしょう？

おそらく、主イエスの言われた第一の戒め、すなわち、神への愛は、礼拝をしっかりと守り、神におささげするという事に尽きるのではないのでしょうか？神の創造や救済の恵みにおける豊かな愛に答えて、心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、私たちの神である主を礼拝させていただきましょう。また、第二の戒め、すなわち、隣人愛は、隣人＝他者に対してでき得る限りの優しさを示すことなのではないのでしょうか？「愛は寛容であり、愛は親切です」(I コリント 13:4)とありますように、神に赦され、救われた者として、誰に対しても寛容と親切の優しさに生きたいものです。

神にならない決意

「すると、試みる者が近づいて来て言った。『あなたが神の子なら、この石がパンになるように命じなさい。』イエスは答えて言われた。『「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」と書いてある。』」
(マタイの福音書 4 章 3～4 節)

いわゆる「バベルの塔」(創世記 11 章 1～9 節)の話に象徴されますように、私たち人間は「神になる」誘惑に常に脅(おびや)かされているのではないのでしょうか? つい権力や地位を得ますと、人間はたちまち、神になろうとするものです。そのことは歴史が如実に物語っています。

そんな中、人となられた神、主イエス・キリストは、「神になる」誘惑と闘われました。上掲のみことばから始まる荒野の誘惑において、主イエスはサタンを試みに遭われますが、ある意味、それは、まさに「神になる」誘惑だったと言って過言ではないのではないのでしょうか? サタンの「あなたが神の子なら・・・」という甘い誘惑の言葉に、主イエスは「(みことばには)～と書いてある」と(旧約)聖書の言葉で対抗し、サタンを退けたのです。

使徒の働き 14 章には、ある足のきかない男の癒しがきっかけとなって、パウロとバルナバが神格化される場面が出て参ります。その際、二人は少しだけでも神格化された気分、神になった気分を味わおうともせず、きっぱりと即座に「私たちも皆さんと同じ人間です」(15 節)と宣言し、栄光を神にこそ帰して、そんな神に立ち返るべきことを宣教しているのです。

ぜひ、私たちキリスト者は、人が「神になる」誘惑に負けずに、神が人となられたキリストの歩みにこそ従い、神にならない決意を日々、新たに継続したいものです。

悪い分裂、良い分裂

「あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」
(ルカの福音書 12 章 51～53 節)

私たち人間は、しばしば意見を異にして、互いに対立することがあります。教会においても決してないとは言い切れません。いえむしろ、よくあるのではないのでしょうか？そのような対立が悪い意味での決裂になってしまうこともあれば、時間とエネルギーは費やしますが、最終的には多様性を理解し合って、やがて一致することもあるでしょう。また、良い意味で距離をとりながら、敢えて分かれて行動することもあり得るのではないのでしょうか？第二回伝道旅行に見るパウロとバルナバがそうです。

このように見ますと、分裂は必ずしも、悪いとばかり言えないのかもしれませんが、良い分裂というものがあるかどうかは分かりませんが、私たちが人間として多様性の中を生きていくのであれば、それなりに考え方の相違や強調点の違いなどによる距離感は生じるものではないのでしょうか？そのような距離感をいい意味で確保しながら、互いを尊重しつつ、遠いところでは同じ方向を向いていく。キリスト教界における分派はそういう意味でも、ある程度、許容されるべきなのかもしれません。

聖書復帰(一致)運動の“キリストの教会”なのに何を言っとるか！との批判も聞こえてきそうですが、私たちの群れ自体も、実は一致を目指しつつ、歴史的には早々に分裂しているのです。むしろ、大切なのは、私たちの運動が大切にしようとした「大事には一致を、小事には自由を、全てには愛を」というモットーではないのでしょうか？

逆算の美学 ～天国から“今”を見る～

「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」

(ピリピ人への手紙3章20節)

今、藤井四段の活躍などもあり、将棋界や将棋に注目が集まっています。最近、私も息子と将棋を指したりすることがありますが、決して私たち親子とクリスチャン棋士・加藤一二三九段と藤井聡太四段を重ね合わせているわけではありません。(余談)

ところで、将棋の世界では、ある意味、勝負に勝利した状況から逆算して“今”打つ手を決めていると聞いたことがあります。凄い逆算力なのではないでしょうか？マラソンなどの競技も、ゴールからの逆算で“今”を走るそうです。

おそらく、多かれ少なかれ、私たちもある程度、そんな逆算で生きているのではないのでしょうか？年金や保険への加入など、老後の備えはその最たるものでしょう。

そして、キリスト者としては、もう一歩進んで、この地上生涯の終わりである“死”やその後の歩み、すなわち、天国での歩みのことも想定して、そこから逆算する必要があるのではないのでしょうか？

私は今でも、七月になるとワクワクし出します。なぜなら、夏休みが近付いていることを意識するからです。子供の頃や大学時代の私にとって、夏休みは最高の時間でした。そんな素晴らしい時が来るのだから、それ以前のテストとかの試練も何とか乗り越えることができたのです。

私たちキリスト者には神と共なる永遠の夏休み、究極のパケーションが控えております。そんな素晴らしい時から逆算して、“今”を生き、それなりの試練や死をも何とか乗り越えさせていただきます。何はともあれ「私たちの国籍は天にあります」。

祈りの継続は力なり！

「いつでも祈るべきであり、失望してはならない…」

(ルカの福音書 18 章 1 節)

「絶えず祈りなさい。」

(テサロニケ人への手紙第一 5 章 17 節)

こんな話を聞いたことがあります。・・・雨乞いの祈りをすれば必ず雨が降るといふ部族が存在するとの報告を受けた宗教学者が、早速、現地へと視察に行きました。そして、視察から帰って来るなり、記者会見を開いてこう言ったというのです。「確かに、彼らが祈ると必ず雨が降るといふ事実を確認できました！」。信じられない報告に驚いた記者たちが「それは本当ですか？」と詰め寄ります。すると、宗教学者はその顔に笑みを浮かべて言いました。「彼らが祈れば必ず雨が降るといふのは事実です。なぜなら、彼らは雨が降るまで何日でも祈り続けるからです!」。

この話を聞いた当初、私はこの話を単なる笑い話だと考えていました。しかしながら、よく吟味してみますと、この話は単なる笑い話ではなく、むしろ、祈りの本質をついた話なのではないかと思いついたのです。なぜなら、上掲のみことばのように、主イエスは「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」と言っていますし、使徒パウロも「絶えず祈りなさい」と言っているからです。

そう、祈りは点ではなく、むしろ線であり、祈りで最も大切なことはその結果以上に、その継続性、プロセスなのではないでしょうか？そして、そんな祈りの継続、プロセスにこそ、私たちが神の臨在の中を歩む最善の道があると言えましょう。

また、仮にイエスやノーという祈りの答えが出た後も、それを受け留めつつ新たな祈りを継続していく時、その祈りの体験が私たち信仰者には大きな力となるはずですよ。

伝動力は影響力

「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」
(マタイの福音書5章13～16節)

“山上の説教”の中で、主イエスは上掲のみことばにありますように、キリストの弟子、すなわち、キリスト者は、「地の塩」であり、「世界の光」であると言われました。注目したいのは、「～になりなさい」と言われているのではなく、「～である」というように、ある意味、宣言されているということです。

私たちキリスト者は、決して教会の中や兄弟姉妹の交わりにおいてだけではなく、むしろ、それらの外の世界においてこそ、「塩」のような働き、「光」のような存在として期待されているのではないのでしょうか。「地の塩」の「地」はヘブライ語で「世界」を意味する“エレッツ”をイメージしていますし、「世界の光」の「世界」はギリシア語の「世界や宇宙の広がり」を意味する“コスモス”の訳語です。

そんな教会の外の世界、この世の中にあつて、キリスト者は「塩」や「光」であることが前提とされ、むしろ、そこで世の中の人々に「塩けをつける」、彼らを「照らす」働きが求められているのです。それはまさに、キリスト者として証しを立て、良い影響を与えるということではないのでしょうか？まさに、伝動力は、影響力なのです！

水路のそばに！

「まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のように。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」（詩篇1篇2～3節）

梅雨の到来と共に熱中症の危険が高まる季節となりました。適度な水分補給が欠かせないことは言うまでもありません。何しろ人間の体の80%は水(分)だからです。ちなみに、水(分)が必要なのは、人間や動物だけではなく、植物も同じです。

私がかつて米国留学していた際、弟がいたテキサス州アビリンを訪問したことがあります。私が滞在していたテネシー州メンフィスとは違って、そこはいわゆる乾燥地帯で、辺りには野生のサボテンが自生していました。私は小さなサボテンを記念に持ち帰り、エアコンを24時間つけっ放しにしていた寮の部屋に鉢植えにしました。そして、“サボテンには水がいらぬ”を真に受けて、一年間一切水をやりませんでした。外見に変化はなかったので何も問題ないと思い込んでいたのですが、ある時、試しにサボテンを触ってみたら、ポキッと根元から折れてしまい、何と中が完全に空洞になっていたことに気付いたのです!? サボテンには申し訳ないことをしました。

上掲のみことばにありますように、主のみことばを喜びとし、それを口ずさむ人は「水路のそばに植わった木のように」で、「時が来ると実がなり、その葉は枯れない」と言います。仮に日照り、旱魃が続いても、水路のそばに植わった木は、根が水路に直結しているためにそこから十分な水分を補給できるのです。私たちも主に直結すべく、水路のそば、すなわち、みことばの上にご座す生活をしていきましょう。

何をするかと同じくらい、何をしないかも大事です

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」(詩篇 46 篇 10 節)

「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」
(出エジプト記 14 章 14 節)

14 歳で公式戦 20 連勝中の棋士、藤井聡太四段。ついこの間、ドイツのデュッセルドルフで行なわれました世界卓球で、何十年ぶりのメダルを相次いで獲得した、16~17 歳のいわゆる“黄金世代”の女子高生三選手。さらに圧巻は、世界ランク 6 位の日本男子卓球界のエース、水谷準選手を破ってベスト 8 に登り詰めた若干 13 歳の中学生、張本智和選手などなど。今、日本では 10 代の活躍に目覚しいものがあります。

その一方で、気力や体力の衰えにより、第一線を退く者たちがいるのも、また事実です。とくに、スポーツ界では、その激しさが凄まじければ凄まじいほど、その引退の時期は早くなるものなのではないでしょうか？そして、そんな引退とか退職、あるいは続けてきたことを辞めることには一抹の寂しさが伴うものです。ただ、辞めることで始まることもあるのではないのでしょうか？後進の成長を助け、励ます役割などもその好例です。「何かをやめてみるのも、新しく始めることです」(軽井沢高原教会)。

ちなみに、結婚式場としての軽井沢高原教会の最新広告キャッチコピーはこうなっています。「何をするかと同じくらい、何をしないかも大事です」。本当にそうではないのでしょうか？少なくとも、登り調子の 10 代ならともかく、そうでない世代なら、むしろ、「何をしないか」にシフトしていく必要があるのかもしれませんが。それこそが、天国へと昇っていくための準備であり、そこに信仰生活の醍醐味はあります。

神様の柔軟性に学ぶ

「だれも、真新しい布切れで古い着物の継ぎをするようなことはしません。そんな継ぎ切れは着物を引き破って、破れがもっとひどくなるからです。また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、皮袋は裂けて、ぶどう酒が流れ出てしまい、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れれば、両方とも保ちます。」
(マタイの福音書9章16～17節)

私たちはともすると、「古いものは良い」という懐古主義に陥ってしまったり、逆に、「新しいものこそ良いのだ」という革新主義になびいたりするものではないでしょうか？しかしながら、古いものにも、新しいものにも、それぞれ一長一短があると思います。やはり、その良さは、臨機応変に、その文脈や状況で判断しなければならぬのではないのでしょうか？

ところで、上掲のみことばは、必ずしも、古いことが悪いことで、新しいことが良いことだ、と言っている訳ではありません。現に、ぶどう酒と皮袋のたとえでは、新しいぶどう酒は、これから発酵膨張する可能性があるので、柔らかくて伸縮自在な新しい皮袋に入れるべきだと言っているのに対して、着物の継ぎのたとえでは、古い着物に新しい布切れで継ぎをしてはいけないと言っています。むしろ、伸びのない古い着物には、やはり伸びのない古い布切れで継ぎをすべきだと言っている訳です。

ここで大切なことは、新しいとか古いとかということではなくて、その臨機応変さ、柔軟性なのではないのでしょうか？それにしましても、私たちの救いのためになされた、旧約から新約への転換における神の臨機応変さ、柔軟性には目を瞠るものがあります。

新緑に想う、神のみわざの奥深さ

「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。・・・」
(イザヤ書9章6節)

新緑の眩しい季節となりました。そんな木々の緑に目を留める時、その心に、何とも言えない安らぎや活力が与えられるのは決して私だけではないと思います。「イ(にんべん)」に「木」と書いて、「休」む。なるほどな〜、と思わされます。

ところで、「青」信号なのに実際には“緑”色だったり、「黒」板と言っても多くの場合、深“緑”色しているのは、元来、緑色が目に優しい色だからだと、聞いたことがあります。神様は、地球を、そして、世界を、そんな目に優しい緑色で染めて下さったのですね。神の創造のみわざにおける優しさ、愛を感じます。

そんな“緑”つながりで、上掲のみことば、預言者イザヤのメシア預言。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる」。幼子のことを「赤子」と言うこともあれば、「みどりご(嬰兒)」と言うこともあります。「赤」は生まれたばかりの色から連想できますが、はたして「緑」はなぜなのか？そんな疑問を口にしたら、祈祷会に出席していたある姉妹がその場で調べて下さり、「みどりご」の「緑」は、緑の若葉のイメージであることが分かりました。

イエス・キリストが誕生する七百年以上も前に、預言者イザヤの口を通して語られた、神の救いのみわざ。いかに神様が私たちを救おうかと、旧約の時代から新約の救いを計画して下さったという、その救済のみわざの奥深さに驚かされます。

新緑に改めて想う、神の創造のみわざ、そして、救済のみわざの奥深さ。
ハレルヤ！

パウロのアラビヤ…まず、祈る時を！

「異邦人の間に御子を宣べ伝えさせるために、御子を私のうちに啓示することをよしとされたとき、私はすぐに、人には相談せず、先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行き、またダマスコに戻りました。」

(ガラテヤ人への手紙1章16～17節)

使徒パウロは、あの劇的な回心の後、(ルカが書いた『使徒の働き』にはその記述がないのですが)パウロ自身が書いた『ガラテヤ人への手紙』(上掲のみことば)によれば、まずアラビヤに出て行ったことが分かります。おそらく、ここで言う「アラビヤ」とは、地理的には、いわゆるアラビヤ半島の砂漠地帯ではなく、もう少し手前のダマスコの東南にあったナバテヤ王国(その中心地の一つ「ペトラ」は現在、世界遺産)の辺りではないかと考えられています。

ところで、パウロのそんな“アラビヤ”滞在は一体、何のためだったのでしょうか？もちろん、異邦人宣教の一環ではなかったかとの考えも少なからずありますが、多くの註解者は、より個人的な事情、おそらく祈りと黙想のためだったのではないかと考えています。確かに、聖書に登場する“神の人”と言われる者たちは、その活動の第一線に出る前に、しばしば荒野や寂しい所に退いて、まず、神との深い交わりを持ったのではなかったでしょうか？・・・パウロの“アラビヤ”、モーセの“ミデヤン”、そして、主イエスの“荒野”。

ルターは「2時間は祈らねばならないほど忙しかった」(卓上語録)と言ったそうですが、私たちも、多忙な時ほど、重要な時こそ、まず一旦立ち止まって、祈りましょう！

母なるとりなし

「…あなたがたは乳を飲み、わきに抱かれ、ひざの上でかわいがられる。母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰め、エルサレムであなたがたは慰められる。あなたがたはこれを見て、心喜び、あなたがたの骨は若草のように生き返る。…」

(イザヤ書 66 章 12～14 節)

思い返してみてください。…あなたの幼かった頃、あなたの母親は、文字通り、あなたの尻拭い(=おむつ交換)をはじめ、あなたがやりたくてもできなかったことを全てとりなして下さったのです。あなたが今こうしてあるのは、そんな母親のとりなしがあったからこそではないでしょうか?…今日は「母の日」です。

有名な話ですが、アウグスチヌスはその若い頃、放縦な生活に身を任せ、靈的には異端にまで走ってしまう始末でした。しかしながら、その背後で、彼の母モニカは来る日も来る日もとりなしの祈り、涙の祈りをささげていたのです。そして、そんな母モニカの涙のとりなしのうちに、やがてアウグスチヌスは回心し、後に「古代最大の神学者」と言われるまでになりました。

讚美歌 510 番の 4 節の歌詞が浮かびます。「汝がために祈る母の、いつまで世にあらん。とわに悔ゆる日の来ぬ間に、とく神に返れ。春は軒の雨、秋は庭の露。母は涙、乾く間なく、祈ると知らずや。」。

あなたがこうして救われ、天に国籍を持つようになった背後にも、必ずや誰かの「母なるとりなし」があったはずです。そのことに感謝の思いを馳せながら、今度はあなたが、誰かの救いのために「母なるとりなし」をする番なのではないでしょうか?

やめることは、始めること！

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。わたしは国々の間であがめられ、地の上であがめられる。」
(詩篇 46 篇 10 節)

先日、電車に乗っていましたら、結婚式場として知られる軽井沢高原教会のキャッチコピーに「何かをやめてみるのも、はじめることです」とありました。確かに、何かを「やめる」ことは単なる終わりではなく、むしろ、そこから新しい何か「始まる」ということでもあるのではないのでしょうか？「終着駅は始発駅」と言われます。

上掲のみことばのように、聖書は私たちに問い掛けてきます。「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。」と。また、こうも言われます。「主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない。」(出エジプト記 14 章 14 節)。ともすると、私たちはつい神を差し置いて、出しやばってしまうということなのではないのでしょうか？ゆえに、時に「やめる」必要、「黙る」必要があるのです。ある方は言いました。「私がやる時、私がやるだけ。しかし、私がやめる時、神がやって下さる!」。私たちは神に行動していただくために、時に、何かを敢えて「やめる」という勇気ある撤退、信仰的停止が求められるのではないのでしょうか？

よく言われますように、「正」しいという漢字は、「一」と書いて、その下に「止」まると書きます。すなわち、私たちが「正」しい判断をし、「正」しく行なうためには、やり続けなくて、時に、神の前に「一」旦、立ち「止」まる、「一」旦、やっていることを「止」めるということがむしろ大事なのではないのでしょうか？

出エジプトしたイスラエルは、まさに退路を断ち、やめて、要所要所で立ち止まった時、そこに大いなる神のみわざを見ることになったのです。さあ、やめましょう！

測り知れない主の知恵と力の大きさ、その愛と恵みの深さ

「あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」

(イザヤ 40 章 28 節)

「人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。」

(エペソ人への手紙 3 章 19 節)

以前、私が狭心症の検査を受けるためにある病院に行きましたところ、検査をする機器がその許容量を越えた私の体重に耐え切れない可能性があり、検査がすぐにできなかつたことがあります。最新機器を備えたその病院も私を受け留めることができませんでしたが、主なる神様はどんなに大きく深い私たちの罪をも、より大きくて深い懐でしっかりと受け留めて下さるのです。そんな神様に自分自身を明け渡しましょう。

かつて、ある温泉の脱衣場で、そこに置いてあった体重計に乗りましたところ、針が振り切れて、体重が量れなかつたことがあります。私の体重はそんなに重いのかと唖然としましたが、主なる神様はそれ以上に私たち一人一人を重く(地球よりも重く)受け留めて下さるのです。また、そんな神様の私たちに対する愛と恵み、知恵と力は、それこそ測り知れないほど大きく深く、決して過少評価されてはなりません。

ある時、一人の釣り人が大きな魚を釣ってはリリース(放流)し、比較的小振りの魚だけを捕獲しておりました。不思議に思った見物人が聴き質したところ、釣り人はこう答えたのです。「いえね、うちのフライパンは小さいんですよ!」。私たちはその小さな頭脳ではなく、無限の広がりをもった信仰で、主なる神様を受け留めましょう。

挫折がバネに、迫害がリバイバルに！

「ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」

(コリント人への手紙第二 12 章 10 節)

女子卓球界で今、若干 17 歳の平野美宇選手が快進撃を続け、世界に衝撃を与えています。ことに、出場できなかった 2016 年リオ・オリンピック直後、同年 10 月のワールドカップで 16 歳の最年少で日本人初優勝。今年(2017 年)の 1 月の全日本選手権では、世界ランク 4 位で日本人選手トップの石川佳純選手を決勝で破っての最年少優勝。そして、つい先日、中国で開催されたアジア選手権では、完全アウェーの中、中国のトップ 3、世界ランク 1 位の丁寧選手、2 位の朱雨玲選手、5 位の陳夢選手をことごとく撃破して、見事、こちらも 17 歳で最年少優勝を果たしました。

平野選手自身も語っておりますように、そこには、リオ・オリンピックの選考に惜しくも漏れ、同い年で出場を果たし、団体に銅メダルを獲得した伊藤美誠選手などの活躍を、補欠選手として応援に回った中で目の当たりにした悔しい体験、自らの弱さを痛感した挫折がやがてバネとなり、現在の彼女の原動力になっているのです。

キリスト教 2000 年の歴史は、振り返ってみますと、血の歴史であり、迫害と挫折の歴史でもあったのではないのでしょうか？教会は、ステパノの殉教をはじめとして、度々、自らに大いなる弱さを感じました。しかしながら、その弱さがキリストのゆえに強さへと変えられ、むしろ、キリスト教は迫害や挫折の度に成長・拡大を遂げてきたのです。諸教会に弱さが感じられる昨今、改めて、主にある強さに期待しましょう。

クリスチャンの“ひとしずく”

「そこへひとりの貧しいやもめが来て、レプタ銅貨を二つ投げ入れた。」
(マルコの福音書 12 章 42 節)

南米はアンデス地方に伝わる民話に「ハチドリの一とすく」というお話があります。以下、全文を引用します。

「森が燃えていました。森の生き物たちは、我先にと逃げていきました。でも、クリキンディという名のハチドリだけは行ったり来たり。口ばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは、火の上に落としていきます。動物たちはそれを見て、『そんなことして、一体何になるんだ』と笑います。クリキンディはこう答えました。『私は、私にできることをしているだけ』。」(『ハチドリの一とすく』辻信一監修[光文社])

この話は、一人一人ができることをすることの大切さを教えてくれると同時に、もし、他の多くの者たちも、それに倣って、自分にできることをしていくなら、それは大きな力となり得ることを示唆しているのではないのでしょうか？

かつてマザー・テレサは、反対者から「あなたのしていることにどれだけの意味があるのか？社会変革には程遠いのではないか？」とその活動を非難された時に、こう答えたと言います。「大海の水も一滴のしずくから始まる」。一人一人の力はハチドリの一とすくの如く非力かもしれませんが、それが寄せ集まる時に大きな力となり、さらに、そこに神の御手が働く時にそのひとしずくは私たちの想像を超えて大きく用いられるのではないのでしょうか？ぜひ、あなたの“ひとしずく”、一タラント、二レプタ、二匹の魚と五つのパンを神の前に差し出しましょう！

みことばに生きる ー聖書という望遠鏡を通してー

「・・・人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる・・・」
(申命記8章3節)

ある方は言いました。「みことばは“読む”ものではなく、“聴く”ものです」と。すなわち、みことばは、ただ文字面を眺めるだけではあまり意味がなく、それではまさに絵に描いた餅です。そうではなく、まず、神の語り掛けとして、みことばに聴き、そして、ただ聴くだけでなく、それを実践・実行して初めて意味がある、ということなのではないでしょうか？

今年の御茶の水の聖句は、この面の最上段にありますように、「みことばを実行する人になりなさい。」(ヤコブの手紙1章22節)です。これは、簡単なようで、なかなか難しいことです。みことばを実行するためには、それをただ表面的に知っているだけでは不十分で、そのみことばを深く理解していなければなりません。また、そのみことばが生活の中心に据えられている必要があるのではないのでしょうか？

先週の『今日の力』(火曜日)に、下記の詩(P. ブロックス)が引用されていました。聖書は望遠鏡のようなもの。もしその望遠鏡を覗き込めば世界の先まで見える。

でも望遠鏡自体を見るだけでは、見えるのは望遠鏡だけ。

聖書は先にあるものを見るために覗き込むものである。

でもほとんどの人は聖書をただ見るだけ。その人が見るのはただの活字だけ。聖書のみことばという“望遠鏡”を通して、世界を、人生を、そして、はるかかなたの天の御国をも見て参りましょう。それがみことばに生きるということなのです。

「盛る」のではなく、「盛られる」のです！

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇るものがないためです。」

(エペソ人への手紙2章8～9節)

アメリカでは、ちょっと大げさな話を聞いた人が「それは説教者の話だよ (It's Preacher's story.)」などと言って揶揄することがあります。つまり、今風に言えば、説教者は時に“話を盛(も)る”傾向があるということなのではないでしょうか？私自身、穴があつたら入りたいくらいです。ちなみに、“話を盛る”とは、「誇張する」を意味する若者言葉の一つで、「大げさに言う」、「よく見せようと話す」などと言いたい場合に使われます。

(先週の朝の礼拝説教で観ました)アナニヤとサツピラ[使徒の働き5:1～]は、まさに、“話を盛る”ことをしてしまったのではないのでしょうか？正直にその献金が土地の代金の全額ではないことを言えば何の問題もなかったものの、自分たちをよく見せようとして、話を盛ってしまったわけです。もしかしたら、今、国会の場を騒がせている問題もこの類かもしれません。

ところで、アナニヤとサツピラの姿は、現代の「クリスチャンのエリートイズム(エリート主義)」を反面教師として如実に指摘しています。私たちクリスチャンは、上掲のみことばのように、恵みのゆえに、神からの賜物として救われたにも関わらず、あたかも自分の業績のようにそれを誇ってしまっていないのでしょうか？・・・救いの恵みは、私たちが「盛る」ものではなく、神様によって「盛られる」ものなのです。

環境が変わるあなたへ

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」
(箴言 3章 6節)

「終着駅は始発駅」。終わりは始まりでもあります。とくに春は、一つの区切りや別れの季節でもあると同時に、新しい始まりや出会いの季節ではないでしょうか？ただ、そのように環境が変わる際には、それなりのエネルギーを必要としますし、必ずしも嬉しいことばかりではないかもしれません。新しい出発をしたものの、はたしてこれでいいのかと不安になることもあるでしょう。

そんなあなたに、一つのみことばを送りたいと思います。旧約聖書の格言集『箴言』からの一節です。「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言 3章 6節)。慣れない新しい環境でも、そこに共にいて下さる主なる神をこそしっかりと見上げていく時、迷いはなくなり、その歩む道は真っ直ぐにされるというのです。

古代の船乗りは、闇夜に天を仰ぎ、そこに輝く星を見て、それを指標に正しい方向へと航海したものです。私たちも、どのような環境にあっても、見上げれば必ずそこにいて下さる主なる神を決して見失わず、そんな主なる神をこそしっかりと認めて歩んでいきたいと思います。

昨年末に天に召されたシスター渡辺和子さんのベストセラーに『置かれた場所で咲きなさい』という本がありましたが、私たちが置かれた場所で咲くためには、環境が変わっても決して変わる事のない神を見上げ、主を認めていくことが必要なのです。

神様は“ドラえもん”ではない!?

「イエスは涙を流された。」 (ヨハネの福音書 11 章 35 節)

つい先日、息子と一緒に映画「ドラえもん：のび太の南極カチコチ大冒険」を観てきました。・・・もし、“ドラえもん”が実在したら・・・「どこでもドア」での瞬間移動で、通勤やお出かけはラクラク。「タケコプター」で首都高の渋滞や長蛇の列を回避。極めつきは「神様ロボット」、三回願い事を叶えてくれるという優れものです。“ドラえもん”は、そんなあったら嬉しい「ひみつ道具」をその「四次元ポケット」から次々と引っ張り出しては、のび太を助けてくれるのです。

ところで、私たちの信じる神様は、全知全能の神であり、そんな神様にとって、悪以外、不可能なことはありません。しかし、だからと言って、神様は私たちにとっての“ドラえもん”、すなわち、願いを叶えてくれるためだけの存在では必ずしもないのです。もちろん、私たちの願望と神様のみこころ(=私たちの真の必要)が合致すれば、結果的に、叶えて下さるということもあるでしょう。ただ、見誤ってはいけないことは、神様は決して私たち人間の「神様ロボット」ではないということであり、また、神様は人格(=神格)のあるお方であり、私たち人間に対して、むしろ主権者であられるということです。そして、また、そんな神様はその全能を時に現わし、時に秘めつつ、何よりも私たちのそばに寄り添っていて下さるお方なのです。

かつて「ど根性ガエル」という漫画～アニメがありました。Tシャツに貼りついた「平面ガエル」の“ぴょん吉”は、自らを犠牲にして、常に「ひろし」と一体で、喜怒哀楽を共にしたのです。神様は、むしろ“ぴょん吉”に近いかもしれません!?

“これしかない”という歩み

～排他的にではなく、献身的に！～

「子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」

(ヨハネの手紙第一 3 章 18 節)

ペテロは「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間には与えられていないからです。」(使徒の働き 4 章 12 節)と説教しました。また、それ以前に、主イエス・キリストご自身、こうおっしゃっておられます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」(ヨハネの福音書 14 章 6 節)。

要するに、救いというものは、主イエス・キリストを通してでなければあり得ないということなのではないでしょうか？決して「分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」ではない、つまり、どんな宗教を信じていても結局、行き着くところは同じ・・・ではない、ということです。

ただ、問題は、そのことを声高に語ったところで、全くもって説得力はないということです。かえって多くの方は心を閉ざすのではないのでしょうか？排他的、消極的に他の救いの可能性を否定するのではなく、むしろ、“これしかない”という肯定的、献身的な歩みや行動を通して、私たちが「この道にこそ救いがあるのだ！」ということを証ししていく以外にはないと思うのです。私たちが心から喜んで、その“キリスト道”を行く時に、多くの人々は自ら進んで後に続こうとするのではないのでしょうか？

何を上げるのか？

「金銀は私にはない。しかし、私にあるものを上げよう。」

(使徒の働き 3章6節)

朝、起きがけに、息子が「コーラ飲んでもいい？」と聞いてきたら、私はおそらく「コーラッ」と怒るだけでなく、水か牛乳でも差し出して、こちらを飲みなさいと勧めるでしょう。私は息子の欲望(desire)ではなく、必要(need)にこそ応えたいからです。

上掲のみことばは、生まれつき足のきかない男が施しを求めてきた時に、ペテロがそれに対してどう応じたかが描かれています。男はお金を求めたと思われませんが、ペテロはお金ではなく、主の名による癒しを与えています。もちろん、ペテロがお金を持っていなかったこともありますが、ここにはそれ以上の意味があるのではないのでしょうか？

確かに、お金の方が手っ取り早いと考えることもできるでしょう。ただ、仮にお金を与えても、それを使ってしまった後は、引き続き、男には同じ問題が付きまとうこととなります。しかしながら、ここでペテロが与えた主の名による癒しは、根本的に彼の生活を立て直し、彼が自立するのに大いに役立ったのであり、さらには、主の名による救いにもつながるものだったのではないのでしょうか？男は「おどり上がってまっすぐに立ち、歩きだした。そして、歩いたり、はねたりしながら、神を賛美しつつ、ふたりといっしょに宮にはいって行った」(8節)のです。

貧困地域で活動する方はよくこう言います。「飢えた子供に魚を差し出すよりは魚の釣り方を教えた方がいい」。福音宣教も魚の釣り方を教えることに他なりません！

一致が期待できる人間関係とは？

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」
(ヨハネの福音書 13 章 34 節)

人間関係で悩む人は少なくありません。そんな人間関係を見詰め直す上で大切なことの一つは、私たちがそれぞれ人間関係についてどのような基本姿勢を持っているかということなのだとされます。精神科医のトーマス・アンソニー・ハリスは、交流分析において、人間には以下の四つの基本姿勢があると指摘しました。

第一に、“I am OK, You are not OK”、すなわち「自分は良いが、あなたは良くない」という姿勢で、やや自信過剰、極端になり過ぎると独善的になりかねません。第二に、“I am not OK, You are OK”、すなわち「自分は良くないが、あなたは良い」という姿勢で、自分に自信がないというか、セルフイメージが低い方にこの傾向があるかもしれません。第三に“I am not OK, You are not OK”、すなわち「自分も良くないが、あなたも良くない」という姿勢で、かなり悲観的な傾向があるのではないのでしょうか？そして、第四に、“I am OK, You are OK”、すなわち「自分も良いが、あなたも良い」という姿勢で、いい意味で楽観的、より前向き・肯定的なのではないのでしょうか？そして、そこには自分も他者をも認める広さがあるのです。

私たちが“共に生きる”存在として、まさに「共存共栄」していくためには、最後の第四の基本姿勢、“I am OK, You are OK”、すなわち「自分も良いが、あなたも良い」という姿勢が欠かせません。そして、このような基本姿勢にこそ、一致、すなわち、主にあつて「一つになる」可能性が残されているのではないのでしょうか？

後の者が先になる・・・

「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

(マタイの福音書 20 章 16 節)

先日のバレンタイン・デー(2/14)に、チョコなんて到底もらえないと思っていた男の子に、予想を大きく裏切って、本命のチョコが贈られたような、アンビリーバブル(信じられないような)話が飛び込んできました。私の弟がメールをしてくれて、この嘘のような本当の話を知りました。

それによりますと、同日、岡山県笠岡市で開かれたマラソン大会の、小学三年生から六年生までがエントリーできる三キロ・コースの部で、その珍事は起きました。263人が参加したその部では、262人が正規のコースではない誤ったルートを走り、実際には二キロ余りを走ってゴールしていました。ところが、かなり遅れて走っていた最後尾を走る一人は、係員が後ろから付き添う形で走ったために、正規のルートに導かれ、彼だけが正規のルートを走りきったことになったのです。それゆえ、前を走っていた262人は全員失格となり、最後にゴールした児童が優勝者として表彰されました。

この出来事は、私たちに上掲のみことば「あとの者が先になり、先の者があとになるものです」を思い出させるだけでなく、下記のこんなみことばも思い出させてくれるのではないのでしょうか？

イザヤ書 30 章 21 節「あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから、『これが道だ。これに歩め。』と言うことばを聞く。」。

私たちに伴って下さる主なる神を覚えつつ、その背後から響く聖霊の御声に従って、みこころにかなう正しい道をこそしっかりと、じっくりと歩みたいと思います。

バスがダメなら飛行機があるさ

「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。・・・泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある。」
(伝道者の書3章1、4節)

稀勢の里が綱を締め、横綱土俵入りを披露する日が来ることを、どれだけ多くの茨城県民が待ち望んでいたことでしょうか？魅力度ランキング三年連続最下位で気持ちも沈んでいた茨城県民は、茨城県出身の横綱の誕生を心待ちにしていたのです。

しかしながら、いつももう一步のところまで裏切られては、ため息をつく県民。はては、照ノ富士、琴奨菊、豪栄道と、他の大関たちにことごとく優勝では先を越される始末でした。それでも、県民は稀勢の里を見離さず、どこかで待ち続けていたのです。

そんな茨城県民に、今年の初場所、念願の稀勢の里・初優勝と横綱昇進が一気にやって来たのです。喜ぶ県民は口を揃えて言いました。「待っていました！」。

作家であり、後にも先にも唯一の女性の横綱審議委員を務めた内館牧子さんが、そんな稀勢の里の初優勝と横綱昇進に際して、何度裏切られても稀勢の里を待ち続けてきたことを新聞インタビューに告白しています。そして、こう述べています。私はずっと「バスがダメなら飛行機があるさ」と思って待っていました、と。

内館さんのエッセーにもなっている「バスがダメなら飛行機があるさ」という言葉。どこかの社長さんが、何度バスに乗り遅れるようなことがあったとしても、もしかしたらタイミングよく飛行機に乗れて、乗り遅れたバスよりも早く目的地に着くことがあるかもしれない、と言っていたことに彼女自身とても励まされたそうです。

そう、私たちの人生にも、滴を持して飛んでくる神様という飛行機があるのです！

クライスト・ファースト

「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」

(ピリピ人への手紙1章21節)

「都民ファースト」(小池百合子都知事)、“アメリカ・ファースト”(ドナルド・トランプ新大統領)…。今、～ファーストが大変流行していますが、あなたは一体、何ファーストでしょうか？

御茶の水キリストの教会は、来年(2018年)、教会創立七十周年の節目を迎えようとしています。そんな御茶の水の教会創立は、言うまでもなく神様のみわざに他なりません。人間として大きく関わった兄姉の一人に、宣教師のO. D. ビクスラー兄がおります。そして、そんなビクスラー兄のモットーは「クライスト・センタード」(キリスト中心主義)でした。言い換えれば、それは「クライスト・ファースト」(キリスト優先主義)ではないでしょうか？

御茶の水キリストの教会には、そんな「クライスト・ファースト」(キリスト優先主義)の精神が息づいているはずなのです。にもかかわらず、教会の伝統とか、信仰生活の年功序列とか、社会的ステイタスの有無とか、そういうものに左右されているとしたら、私たちには「クライスト・ファースト」(キリスト優先主義)の精神が希薄になってしまっているのではないのでしょうか？それでは、“キリストの教会”の名が廃りますので、名称変更が必要になるでしょう(“チャーチ・オブ・クライシス”とか!?)。

私がよく口ずさんだ子供讃美歌に♪イエス様がいちばん♪という歌があります。「どんなに淋しい時でも、どんなに悲しい時でも、イエス様がいちばん、イエス様がいちばん・・・だって、イエス様は神様だもの、だって、イエス様は神様だもの！」

霊的ルーティーン・ワークの大切さ

「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」
(使徒の働き 2 章 42 節)

「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」
(へブル人への手紙 10 章 25 節)

先日、山手線の車内広告で、ルーティーン・ワーク(=段取りや決まった手続きに従って行なわれる仕事や働き)を新鮮な思いできちんとこなしていくことこそが“できる人”になる秘訣だ、というような触れ込みの自己啓発本の宣伝を目にしました。ルーティーン・ワークと言えば、決まりきったつまらない仕事、マンネリ化しがちな働きというようなイメージが強いのではないのでしょうか？

しかしながら、そういうルーティーン・ワークの積み重ねがいかに重要であるかは、あのメジャーで 10 年連続 200 本安打や 3000 本安打、日米通算の安打数の世界記録を達成したイチロー選手が体現している通りです。イチロー選手の次の試合への準備は、前の試合終了後のロッカールームから始まるのです。談笑したり、飲んだりしているチームメイトをよそに、入念なバッドやグローブの手入れ。また、足腰を鍛えるためにエレベーターではなく階段を選び、膝を守るためには階段ではなくスロープを選択するイチロー選手。そこには、まさに、ルーティーン・ワークの積み重ねがあるのではないのでしょうか？「小さな一步の積み重ねでしか遠くへは行けない」(イチロー)。私たち信仰者にとりまして、大切なルーティーン・ワークがあります。毎日のディボーション、週ごとの主日礼拝、その中で行われる“主の食卓”やささげ物……。

信仰の体現者、ハリー・ファックス兄

「それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。」
(ヤコブの手紙2章17節)

新しい年、2017年の到来を待つかのように、今年の元旦、敬愛しますハリー・ファックス兄が95歳で天に召されました。宣教師の子供として日本に生まれ、自らも弟のローガン兄と共に日本宣教やキリスト教教育に大きく貢献したことは述べるまでもありません。しばらく前の説教の中でも触れましたように、昨年10月にハリー兄とスカイプ(映像付き電話回線)を通してお話をした際、ハリー兄が何か大きな覚悟をもって(=死を意識して)お話しして下さったように感じたことはお伝えした通りです。あれが私(野口)にとってはハリー兄との最後の会話になりました。

そんなハリー・ファックス兄は、教会の内外で多くの日本人に主にある証しを立てられました。ことに、今年の御茶の水のテーマでもある「生きて働く信仰」(信仰の具現化)、みことばの実践ということにおいては、良き模範を示して下さいました。ハリー兄には、こんなエピソードが残されています。

ハリー・ファックス兄が伝道の傍ら、学園で聖書の授業をしている際、一人の生徒が立ち上がって、宣教師たちの車使用や贅沢に見えた衣食住を責め立てたそうです。「私たち生徒が貧しさに喘いでいるのに、あなたがた宣教師が豪華な暮らしをしていたのでは、福音も何もあったものではない!」。それに対し、ハリー兄は俯き、開かれた聖書には涙が落ちたと言います。そして、その後、ハリー兄は即座に車を売り飛ばして自転車に乗り替え、洋服も農家から分けてもらったもんぺに、靴も草履に、お昼は日の丸弁当になったそうです。※後日、生徒たちの懇願で車は買い戻された模様。

生きて働く信仰

聖霊に導かれて、祈り、奉仕し、伝道する教会を目指して

「みことばを実行する人になりなさい。」 (ヤコブの手紙1章22節)

若い方は馴染みがないと思いますが、かつて三波春夫という歌手は「お客様は神様です！」をステージ(コンサート)の決まり文句としていました。要するに、歌を聴きに來てくれるお客様がいなければ、自分は生きることができない(生活していけない)という謙虚な思いから出た言葉なのではないでしょうか？

全く違う意味なのですが、教会でも「お客様は神様です」という言葉が妥当するかもしれません。それは、すなわち、教会では、そこに集う兄弟姉妹一人一人は、神様に仕える奉仕者であって、決して“お客様”であってはいけないという意味です。

元アメリカ合衆国大統領であったJFKこと、ジョン・F・ケネディは、その大統領就任演説で国民に対してこう言ったそうです。「アメリカ合衆国国民の皆さん、皆さんはアメリカに何をしてもらえらるだろうかと期待しているかもしれませんが、むしろ、皆さんがアメリカに対して何ができるかをこそ、考えてみて下さい」と。

正直申しまして、教会も大きくなればなるほど、その一員である教会員の教会奉仕者としての意識は低下し、逆に、サービスを期待するお客様意識が高くなってしまふものではないでしょうか？誰かがやってくれるはずだ、と考えるしまう訳です。

しかしながら、教会はコンサートとは違います。教会は新約聖書の原語ギリシア語で“エクレシア”、その原意は「呼び出された者たち」です。つまり、教会とは、主イエスに倣って、みことばを実行するために、つまり、祈り、奉仕し、伝道するために、神様の恵みのうちに救われた者たちが聖霊によって呼び集められた集いなのです。